

医史学者、そして名プランナー 宗田一先生

日本医史学会理事 長門谷 洋治

昭和三三（一九五八）年四月一二日、第六〇回日本医史学会総会（内山孝一会長）が日本大学医学部板橋病院で行われたが、小生にとってはこのときが最初の上京であった。しかし不安はなかった。宗田一先生がついていて下さったからである。神田の旅館で二人揃っての朝食をとり、会場に向った。いまから三八年も前のことで、宗田先生もまだ三十歳台であった。

そのころ関西には、当時の関西支部長 中野操先生を中心とする強力なネットワークがあり、その活動にはめざましいものがあつた。さらに中野先生は支部の会合以外に家族会というのを持たれていた。常連メンバーは中野先生のほかに三木栄、阿知波五郎、岡西為人、布施玄治、大岡忠明、それに宗田一の各先生で、夫妻同伴、順番に幹事役となつて小旅行をなし、食事をともにされた。この中では宗田先生夫妻がもつとも若かつた。昭和四〇年代に入ってから小生も仲間入りさせていただいたが、そのころから亡くなるかたがあいつぎ、この会は自然消滅した。

小生が宗田先生を知ったころの先生のおすまいは京都市の御所や府庁の近く、上京区室町通にあり、いかにも京都らしい町屋であつた。沢山の書物、資料が各所に整然とつみあげられてあり、初期のヘボン辞書をいただいたこともあつた。その後、現在の西京区桂へ移られた。

中野操先生は三回にわたって日本医史学会総会会長をつとめられたが、そのさい立案・企画で頼りにされていたのが宗田先生で、同先生はいつも逸早く綿密なプランを提示され、見事な補佐役の任を果された。戦後しばらくの間は本部

が十分に組織化されておらず、会誌の定期刊行もままならなかった。当時、本部の事務面を仕切っておられたのは石原明先生であつたが、宗田先生は石原先生とも親しく、それが軌道に乗るまで陰に陽に協力された。

昭和三五年、当時阪大医学部衛生学の丸山博教授が医学史研究会を旗あげされた。医学学会の長老級の人の中にはこれを敬遠、無視される人もあつたが、宗田先生は最初からこれに関与、医学学会との橋渡しの役割を果された。のち中野日本医学学会関西支部長が老境に入られ、その大会の開催が危ぶまれ、会誌『医譚』も廃刊寸前に追いこまれるまでになつたが、宗田先生は中野先生の後任を藤野恒三郎先生にお願い下さり、さらにそのあとを現在の山中太木先生に依頼いただき、両先生の快諾により、その命脈を保つことができた。そして宗田先生は医学学会関西支部の秋季大会を医学史研究会と共催することを提案され、『医譚』に投じられた原稿を『医学史研究』に転載する処置もとつて下さつた。

中野先生の宗田先生への信頼は前述のように厚く、「宗田君に質問するとすぐに返事がかえってくる」といつておられた。この恩恵を受けられたかたは多いことだろう。小生も亡くなる直前まで、沢山のお手紙や別刷をいただいた。数行のメモの中にも、ちよつとほめ言葉も加えられ、そこには後輩を暖く見守る姿勢が見てとれた。むろん学問的にはきびしく、「原典にあたれ」が信条であつた。豊富な原典を背にいわゆる定説、たとえば明治初期のドイツ医学移入の経緯についても自説を展開された。そのレパートリーは広く、医薬を中心に古今東西にわたつた。さればこそ『図説・日本医療文化史』（昭和六四年 思文閣出版のごとき大冊をものにするのができたのであろう。その前に『図録日本医事文化資料集成』（全五巻、昭和五四年 三一書房）の編集にもあたつておられるが、ここに使われている医療文化とか医事文化という言葉を医学領域に最初にもちこまれたのも先生でなかつたかと思う。

先生の職場は武田薬品とその系列であり、後半は吉富製薬に在籍されていて、小生はときどき大阪市東区（現中央区）平野町の同社にお邪魔したが、いつも快く迎えて下さつた。その前バイエル薬品部におられたころ、北の新地でご馳走に預つたことがある。帰るときにお土産をいただいた。あとで開けてみるとその店で使っている上質の牛肉のカタマリ

であった。まだ牛肉が貴重品の時代だった。

先生はいろいろな要職やときには非常勤の教職につかれたこともあったが、終生在野の身であった。そして関西に執着され、愛着をもたれた。突然の死が無念である。